

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2011年1月5日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 180】

「松がやめればカクもたいしたことない」はJR東経営陣の本音？

J R 東労組松崎明元会長の死去による労使関係の変化についての検証を続けたい。J R 東日本は、松崎氏が率いる J R 東労組に対してどのような労務政策を考えてきたのか。J R 総連元副委員長の四茂野修氏（現国際労働総研監事、J R 総連特別執行委員）は、国際労働総研機関誌「われらのインターVol.11」（2008年7月15日発行）に掲載された「一連の J R 総連弾圧を仕組んだ者たちの素顔（上）」と題する連載記事の中で、会社の姿勢を詳細に分析している（p.30~）。これを読むと、J R 総連・東労組側の、J R 東日本の労政に対する見方がよく理解でき、松崎氏亡き後の労使関係の展開を予測するのに非常に参考になる。順を追って関係部分を紹介していきたい。

浮かび上がったJR経営幹部の関与

1. 15年前の怪文書

今から約15年前の1993年頃、JR東日本経営幹部の話とされる怪文書が出回った。雑誌『財界展望』（1993年9月号）が当時伝えた内容は、次のようなものであった。

松（注：松崎氏）はカク（注：革マル派）じゃないか、という話も出ているが、それはそうに決まっている。会社として松がカクじゃないなどと一度も言ったことはない。しかし、松は生き延びるために会社に協力する姿勢をとってきた。共産党や協会派と闘わせるには、カクマルを使うよりないというのが会社の判断だった。この方針は間違っていなかった。西や東海のようにカクマルを切ってあげればさせるのは得策ではない。あれはバカだ。ストをやられて困っているようだが、あれは自業自得だ。東ではストをやらせない。今後もやらせない。これが東の方針だ。松の最近のやり方には少々頭に来ているようだが、おとなしくさせておくにはこの方法よりない。少々高いアメ玉をしゃぶらせても結局はその方が安上がりだ。これが東の労務方針だ。松はせいぜい2~3年だ。年齢はごまかせない。松がやめれば、カクもたいしたことない。島田（ママ）なら取り込める。その時は会社が前に出る。勝負するということだ。菅家（注：1995年にJR東労組委員長に就任、旧鉄労出身）をやめさせるような動きもあるが、アレは旧鉄労の闘士だからやめさせると旧動労の片肺飛行になってまずい。その時まで守っていく必要がある。…（中略）…いったい、この怪文書は誰が何のために作ったものだろう。そして、その後の成り行きに多くの点で符号するのはなぜだろう。謎を解く大事な鍵を、西岡（注：「マングローブ」著者）が提供してくれた。

松崎氏の死去で会社はJR東日本に対して勝負に出るのか！

この怪文書は、当時も知られていたが、J R 総連・東労組が15年も経過してから急に騒ぎ出したのは、前号で言及したように、この内容の真実性が高まったことと、J R 浦和電車区事件を契機に会社の労務政策がようやく厳格化、つまり、正常化されてきたことによる。怪文書の真偽はさておき、振り返れば、「松はせいぜい2~3年だ」という観測はまったく甘かったと言わざるを得ない。松崎氏は1995年にJ R 東労組の委員長を退任したが、その後も、この世を去るまでの約15年間、本情報で検証してきた通り、J R 総連・東労組、J R 内革マル派の“精神的支柱”“人格的代表者”として尊崇され、強大な影響力を発揮し、組織を私物化し続けてきたのである。しかし、随分と時間は掛かったが、ついに松崎氏の死去という形で、“偉大な指導者”の支配が解けることとなった。怪文書がJ R 東日本経営陣の本音だとすれば、まさに、会社が勝負する時が到来したということになる。

「検証・JR革マル浸透と組織私物化の実態！」はJR連合ホームページに掲載中！ <http://homepage1.nifty.com/JR-RENGO>